

## リレーメッセージ第10回

42期 吉田尚史

同級生の火原くんからご指名を受けました吉田尚史です。ミャンマーのヤンゴン、その後東京にて、この文章を綴っています。暮らした土地の違いに注目して、病いと文化、そして人の死にまつわる事柄について、生活者の視点で書いてみることにします。

ふたつ前の錦織さんと同様、国家公務員として在外公館（大使館）勤務をこの3年半ほどさせて頂いておりました。任地はふたつあって、最初はアフリカの島国マダガスカル、そして転勤となって、東南アジアの上座部仏教国ミャンマーへと移動しました。



最初の任地では、中世ヨーロッパにおいて「黒死病」として恐れられたペストが毎年のように発生していました。例年であれば、外国人がペストに罹ることはまずないので、恐れる必要はありません。貧困とこの病いは無関係ではなく、衛生状態の悪い地区で患者が多く発生していました。ペスト菌は、菌をもつネズミを噛んだノミを介して人へと感染します。腺ペストというリンパ節（腺）が腫れるタイプでは、普段の生活において人から人に菌はうつることは稀です。

しかし私の生活した2017-2018年シーズンは違いました。「肺」ペストという、ペスト菌が肺まで達するタイプの患者が、人口が集中する首都アンタナナリボで発生しました。首都には日本人も集中して住んでいます（とはいえ全部で60-70名程度）。肺ペストは、飛沫を介して人から人へと感染します。ペストが原因で死んだ人はペスト菌を含んでおり新たな感染を引き起こす可能性があるため、行政は家族から死体を引き離し持ち去ろうとしました。このことで住民との対立が起こって問題となりました。マダガスカル人にとって、死体は大切な「先祖」であり、単なる物質ではないためです。

他方、ミャンマーで驚いたのは、ミャンマー人は「お墓を持たない」という話を聞いた時でした。率直に言って、衝撃を受けました。ヤンゴンでは、市内にある公立の火葬場で死体を焼いて灰にします。それで終わりです。その場で灰を廃棄すると言うのです。日本人の感覚からすると共感するのは難しいのではないのでしょうか。本当かどうかと疑問に思い、もう一人のミャンマー人に事実関係を確認してみました。答えは同じでした。ただし多数派である上座部仏教徒ではないイスラム教徒、キリスト教徒、そして中華系の人びとはお墓を持つということでした。

これは一体何故なのかと考えてみました。上座部仏教の大事な考え方のひとつに「輪廻転成」があります。死者の魂はこの世で何度も生まれ変わるという思想です。ミャンマー人は、善行を行い「徳」を積むことを良しとします。寄付行為をすることが生活に染み込んでいます。その背後には、より良い来世を得るという思想が横たわっているようです。お墓の話題に戻れば、死者の魂は次の人

生に向かうので、墓は必要ないとなるのでしょうか。ただし、同じ上座部仏教国である近隣国カンボジアでは、パゴダ（お寺）の敷地内に先祖の墓を設けます。この差を不思議に思いました。機会があればより深く検証してみたい点です。

最後になりますが、北高卒業後を簡単に振り返りつつ、文章を閉じたいと思います。医学部へ進学した後、一貫して（精神）医療を生業としてきました。早いもので約20年が経ちました。ただし私の関心はちょっと普通の医療者とは違っているかもしれません。医療者として仕事をしながら、医療そのものを文化として相対的にみるというものだからです。新年度からは、在外での経験を含めた学びを踏まえて、新たな職場で真摯に教育・研究・臨床活動に取り組みたいと考えています。